

# 「子育て意識・態度に及ぼす親子関係の影響について(2)」

— 母子の絆イメージを通してみた子育て意識と態度の変化 —

○國枝俊弘  
(株) シタシオンジャパン

寺西美恵子  
(財) 幼児開発協会

山下富美代  
(立正大学 文学部)

key words : 子育て, 母子の絆, SD法

## 【研究の目的】

母親の子育てに、母親本人が持っている育児観が、大きく影響していると思われる。本研究では“母子の絆イメージ”に着目し、現在、子育てを行っている母親と、その母親のイメージの差、ならびに子育て態度、子育てにおける問題意識との関連性を、比較、検証した。

## 【方法】

**調査期間** 1999年6月23日～7月5日

### 調査方法

調査は、首都圏在住の0～2歳の第一子を持つ母親(以下、YM) 300名、およびその実の母親(以下、GM) 100名に対し、郵送による質問紙法で行った。

### 設問構成

- (1) 27 対の形容詞からなる5段階の尺度のSD法による「母子の絆」イメージ
- (2) 20 対 40 項目の対比較法による子育て態度
- (3) 29 項目からなる4段階評定法による子育て問題意識

## 【結果と考察】

### 1) 母子の絆イメージの比較

YM群、GM群のイメージプロフィールの比較では、2群間に顕著な差は見られなかったため、YM群、GM群総合のデータを用いて因子分析を行った。

その結果、第1因子として「一生の」「受容的な」などの“持続性”、第2因子として「心地よい」「本能的な」などの“価値性”、第3因子として「はっきりした」「分かりきった」などの“存在性”、第4因子として「自由な」「楽な」などの“情緒性”、以上の4因子が抽出された。この結果に基づき、YM/GMの比較を行った。

因子得点の比較では構造的に大きな差は見られなかったものの、存在性では、比較的、差が大きく、YMは、GMと比較して、母子の絆に対して「あいまい」「分かりにくい」と感じていることが明らかとなった。(図1参照)

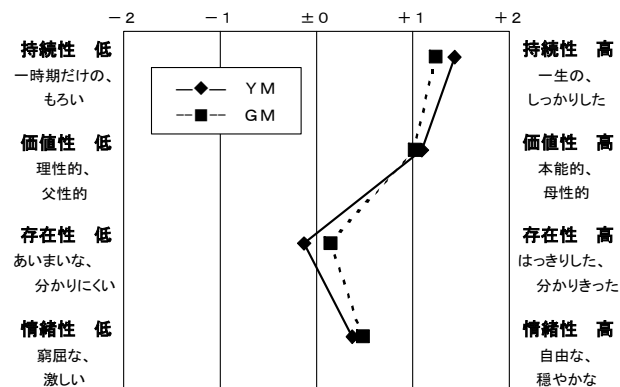


図1 因子得点によるYM/GMの“母子の絆イメージ”比較

## 2) イメージ特性と子育て態度ならびに問題意識

各因子ごとに、高群/低群(上位, 下位 33%)を比較したところ、全体の傾向として、低群は、「子どもと一緒にいることが辛く感じる時がある」「子どものためよりも、自分自身のことを第一に考えたい」などで、高群よりも反応率が高く、問題意識では、低群は、高群よりも“問題ない”と回答する傾向が見られた。因子別に見ると、

- ・**持続性**: 「愛情にもメリハリが必要である(高群 70.8%/低群 82.9%)」「子どもを早く自立させるため、できるだけ手助けしないほうが良い(高群 15.2%/低群 26.7%)」などの設問において、高群よりも低群の反応率が有意に高く、問題意識(問題なし=1, 問題あり=4の4段階評定)では「子どものしつけは、専門家である保育園に全面的に任せること(高群 3.7/低群 3.4)」「自分のスタイルを維持するため、母乳を早めに止めること(高群 3.3/低群 3.0)」などで、低群は“問題ない”と回答する傾向が高い。子どもが乳幼児気であっても、母親自身の生活を優先する傾向が見られる。

- ・**価値性**: 「小さい頃から、悪いことは悪いとしっかりしつけている(高群 87.1%/低群 96.0%)」「子育ては自己犠牲である(高群 6.0%/低群 15.3%)」「子育ては理性的に行うものである(高群 22.0%/低群 37.8%)」の設問において、低群の反応率が有意に高く、義務的に子どもと関わっている傾向がうかがえる。

- ・**存在性**: 「…中略…子育てにはあまり手をかけない(高群 43.6%/低群 67.0%)」の設問において、低群の反応率が有意に高い。子育てに対して、積極的な関与が低く、子どもとの関わりを避ける傾向が見られる。

- ・**情緒性**: 問題意識において「抱っこやおんぶは疲れるので、室内でもベビーラックなどを常に利用すること(高群 3.2/低群 2.8)」「…中略…数回分溜まるまでおむつを取り替えないこと(高群 3.4/低群 3.1)」「…中略…便利な市販の離乳食を常に利用すること(高群 2.8/低群 2.5)」「…中略…自分の生活が大切なので2人目をつくらないこと(高群 2.8/低群 2.4)」などで、低群は“問題ない”と回答する傾向が強く、子育てに対して、消極的な姿勢がうかがえる。

以上の結果から、“母子の絆”のイメージは、世代間による構造的な変化は少ないこと、および因子の特性が子育て意識、態度と強い関連性が明らかとなった。

今後、継続して父親を対象とした同様の調査、もしくは「親子の絆」「父子の絆」イメージを調査し、今回の結果とを比較することで、親子3人を視野に入れた、より実態を反映した調査結果が得られると思われる。

(KUNIEDA Toshihiro, TERANISHI Mieko, YAMASHITA Fumiyo)